地域史料を読む（一）―後藤是山宛徳富蘇峰書翰（一）―

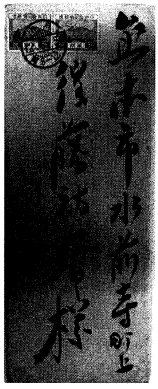
熊本県立大学歴史学研究室

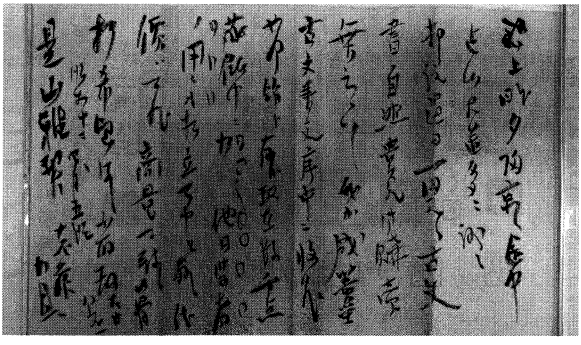
近年、歴史学研究室では学生有志とともに近世・近代の地域史料の解読や講読を行ってきたが、その中から今回は、九州日日新聞社で活躍した後藤是山（一八八六～一九八六）に宛てた徳富蘇峰（一八六三～一九五七）の書翰五通を紹介する。

書翰はいずれも熊本市後藤是山記念館に所蔵されており、翻刻にあたっては、請求番号の若い順に配列し、できるだけ原文の書体と体裁を反映するようつとめた。かかる方針に基づき、書翰①②は清水咲希、③④は藤川雄平、⑤は町田優依、森菜々美の両名が担当した。

なお、難解字の解読や書翰の背景追究にあたっては、猪飼隆明・大阪大学名誉教授の御教示を得た。ここに記して謝意を表する。また、平成二十七年度・県立大学重点事業費「徳富蘇峰・蘆花研究の拠点化に向けて」の一部補助を得た（以上、大島明秀稿）。

①ふ―３１７［各種蔵書印入り便箋一枚を使用］



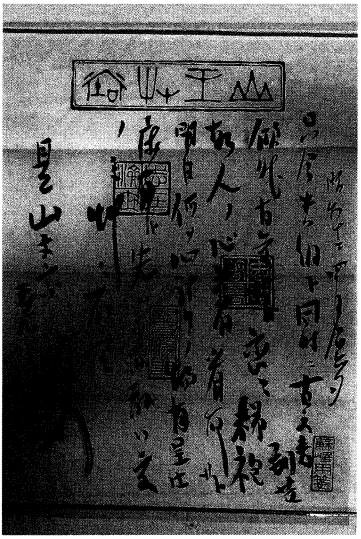


［封裏］
東京銀座西八丁目／民友社／徳富猪一郎
（印）東京市大森山王／一丁目　山王艸堂／徳富猪一郎

［本文］
啓上昨夕帰京候途中
迫御見送多々謝々
却説過日一見候古文
書自然貴兄御購賣
無之候ハ、我か成簀堂
古文書文庫中ニ収蔵
如何歟ト存候現在数千点
蔵儲中ニ加ヘシ他日学者
ノ用ニも為立可申と存候代
價ハ可然商量可致候御骨
折希望仕候不取敢左迫
匆々不一
昭和十二　四月五終　老蘇
是山雅契　九拝

［封］
（消印）品川／12・4・5／前8―12
熊本市水前寺町上／後藤祐太郎様／用事

②ふ―318［各種蔵書印入り専用便箋「蘇峰用箋」一枚を使用］



［封］
（消印）大森／12・4・27／前0―18
熊本市水前寺町上／後藤祐太郎様／御礼

［封裏］
（印）東京市内／大森山王／徳富

［本文］
昭和十二四月念七夕
只今貴翰ト同時ニ古文書到着
欣然拝受仕候恋々綈袍
故人ノ心此有看取仕候
明日何ゾ心計リノ物拝呈仕
度存候先ハ不取敢御受
ノミ艸々不具

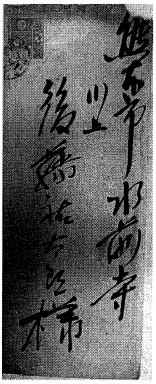
猪

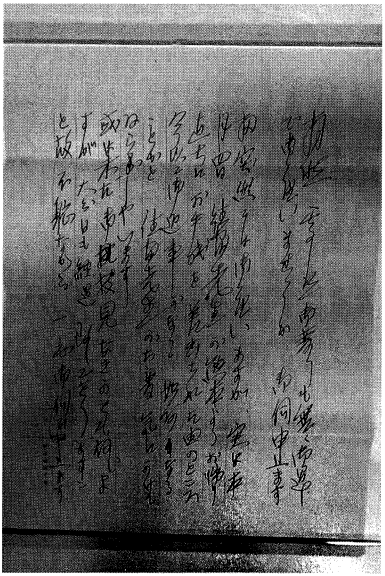
是山文宗

玉几下

【補足】文中の「恋々綈袍故人ノ心此有」という文句は、『史記』「范雎伝」中の「公之所以得無死者、以綈袍恋々、有故人之意（お前が死なないでいられるのは、絹のはだ着を与えて私を思いやり、古なじみの友を忘れない心があったからだ）」が典拠。現代語訳は、『新釈漢文大系』第八九巻（水沢利忠『史記九　列伝二』、明治書院、一九九三年）の谷口匡訳に拠る。

③ふ―319［茶色十二行罫紙二枚を使用］





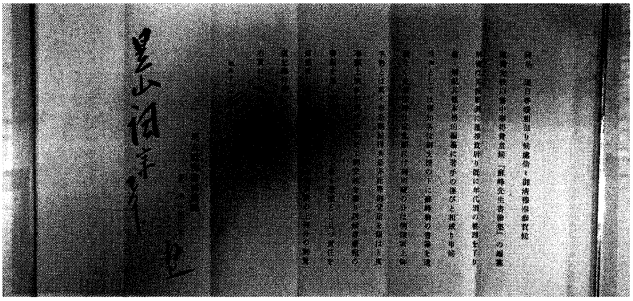
［封裏］
東京銀座西八丁目／民友社／徳富秘書課／八重樫祈美子

［本文］
拝啓　其後御変りも無く御過し
で御坐いませんか　御伺申上ます
扨突然では御坐いますが、実は本
月四日　徳富先生が熊本よりお帰り
直ちにお手紙を差出された由のところ
今以て御返事がなくて　如何なる
ことかと　徳富先生が大変気にかけて
ゐらっしやいます
或は未だ御披見なきかとも存じま
すが　大分日も経過　致してをりますこ
と故不躾なから　一応御伺ひ申上ます
御多用中甚だ御面倒とは存じますか
何卒御一報賜はります様伏して
御願申上ます
先ハ右　御伺ひまで
時下　御自愛専一に願上ます
匆々不一

［封］
（消印）［破損のため解読不能］
熊本市水前寺／町上／後藤祐太郎様／至急

昭和十二年四月十六日
徳富秘書課
八重樫祈美子
後藤様
玉几下
尚々並木氏も先生書簡是非拝借仕度
由に付宣布して願上ます　又拝

④ふ―３２０［活字印刷一枚に加筆］

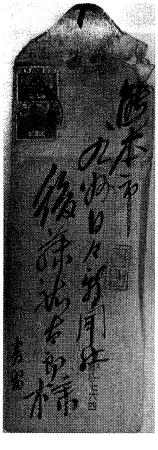


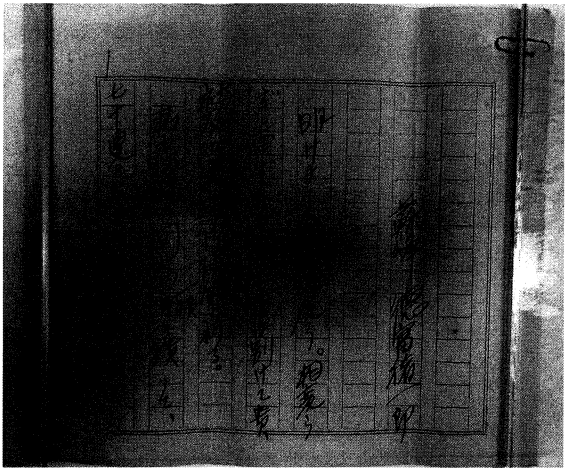
［封］
（消印）□□／12・□・□／□□
熊本市水前寺／後藤祐太郎様
［封裏］
（活字）
東京市京橋区銀座西八丁目九番地／民友社徳富秘書課／並木仙太郎
自宅／品川区大井出石町／五千百五番地

［本文］
（活字部分）
謹呈　逐日春暖相加り候處倍々御清穆奉恭賀候
陳者先般以書中奉得貴意候『蘇峰先生書翰集』の編纂準備は其後順調に進捗致居り既に年代別の整理を了り愈々解説其他本格的編纂に著手の運びと相成り申候
迂生としては辱知各位御支援の下に蘇峰翁の書翰を遺漏なく蒐集採録仕度念願に付御所蔵の分は御探索上御手数とは萬々奉恐察候得共是非此際御貸送を賜はり度奉願上候多年蘇峰翁に於て御交誼を蒙り居候尊台宛の書翰を逸し候事は編者として最も遺憾とし且つ責任を痛感致し候次第に付迂生の微志御洞察の上何分の御賢慮を奉仰候
右重ねて御願迄申上候　敬具
昭和十二年三月吉日
民友社徳富秘書課
並木仙太郎

（手書）
四月廿七
拝上
是山詞宗
玉几下

⑤ふ―933［百二十字詰青色原稿用紙「蘇峰学人用箋」十五枚を使用］





［封］
（消印）□□□／7・1・7／□0—□
熊本市九州日々新聞社／後藤祐太郎様／書留
［封裏］
東京銀座西八丁目／民友社／徳富猪一郎

［本文］

蘇峰　徳富猪一郎

明けまして御目出度う。相変らずと申すよりも、本年は別けて貴社及び貴兄の御清健を祈る。

私も何時の間にや積り積って、七十叟となりました。父の七十の時には、私も父を非常の老人と考え、淇水詩草を編纂して、同好に頒つことがありましたが、今更ら自分がその齢になつたとは、如何にも意外千萬の心地が致します。

旧冬は意外と申して宜布き乎、意中と申して宜布き乎、兎も角も見物人にとっては、興味多き政変でありました。私は誰が何と申しても、此際は挙国一致論であります。併し党人根性なるものは、既に骨髄に徹して、なか／＼門外漢などの想像も及ぶ所ではありません。安達君が如何なる動機で動

いた乎、何故に動いた乎は、私は別段承知しませんが、何は兎もあれ、模範的党人たる安達君も、所謂る党癖の甚だしきには、頗る困却せられたのでありませう。

× × ×

政党が必須のものである乎、ない乎は姑らく措き、今少し改善する必要のあることだけは、間違いありますまい。極めて昔のことでありますが、私が明治三十年松方内閣瓦解前後に踏止って、悪戦苦闘したる際、世間の悪評は殆んど一手の問屋となった程でありました。其時私の詩に、

『斯生不作解嘲文』

といふ結句がありましたが、佐々克堂君がこれを称して、如何にも此くあるべきものだと申したことを、覚えてをります。私は安達君が所謂る静観主義なるものが、それと同じ意味であらうと信じます。

× × ×

扨私の修史の業も、牛の歩でありますが、本日で最早や回数から申して、五千と二つになります。大正七年五月末からの起稿でありまして、長い歳月でありますが、兎も角もその取柄は、長く続いてゐるといふことだけであります。

大正十年八月十日には、一千回に達したと云って、自ら祝しました。十一年十一月七日には、一千五百回になったと又た祝しました。昭和二年三月二十二日には、三千三百三十回になったと自ら祝しました。然るに昭和七年一月の劈頭には、五千回に達し、数日中には第四十四冊開国初期篇を書上ることになってゐます。織田、豊臣、徳川時代は云ふ迄も無く、孝明天皇時代に入りましてから、既に十五冊を書上げてをります。

而して只今の処は、恰も文久二

三年にて、七十年前私が生れたといふよりも、将に生れんとする当時の所を書いてをります。これが明治四十五年七月、明治天皇崩御迄、幾冊にて纏る乎。将た幾年経る乎予言は出来ませんが、相変らず元日でも大晦日でも、烏の鳴かぬ日はあっても、国民史を起艸せぬ日はありません。世間の受けがよいとか、よくないとかいふことは、問題ではありません。書いて置けば何とか後世子孫の為にもならうかと思ふのであります。

× × ×

但だ海外には愛読者が多いと申す程にもありますまいが、出で来りまして、独逸人、英米人などの間には、或は論評し、或は翻訳の許可を乞ひ来たるものが、近頃では若干あります。

私は唯物史観も、絶対的排斥しませんが、又た歴史の解釈は悉く唯物史観で定むべきものではないと信じます。人間は哲学者よりも実際か霊妙であり、自由であり、且つ不可思議であります。されば人間万事一切のことを、唯物史観で判断するなどゝいふことは、余りに人間を見縊った話であります。私の歴史は、人間を人間として書き、社会を社会として書き、国民を国民として書き、別て日本国民を日本国民として書く積りであります。

種々申上たいこともありますが自分の念頭に最も多きことを申上げましたから、自然歴史に就いて贅弁を弄することゝなりました。未だ老の繰り言と申すほどでもありますまいが、御勘弁下さい。

× × ×

一日の午後から一寸熱海に参りました。

晨風満海楼。四顧曙光稠。雲外有飛

信。天兵入錦州。

尚ほ他に一首。

『江山一碧映晴瀾。嶋影山光独倚欄
　野老何須負暄坐。橙黄梅白不知寒。』

熱海では梅園の梅は既に五分以上開いてゐました。貴地にては如何。

（昭和七稔一月初六　民友社に於て）